

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム
派遣研究報告書

2012年 10月 10日

派遣者氏名（専門分野）	藤本 真名美	（ 日本・東洋美術史 ）
-------------	--------	--------------

下記のとおり報告します。

記

研究テーマ	水越松南とその師・谷口 香嶠研究—明治期の図案流行と大正期の南画再評価の関係
-------	--

派遣期間

2012年 9月 9日 ～ 2012年 9月 15日

訪問研究機関	国	都市	訪問機関	受入研究者
	台湾	台北	国立故宮博物院	なし
	台湾	台北	国家図書館	なし

派遣先で実施した研究内容

派遣者は日本南画院の画家・水越松南(1888～1985)とその師で竹内栖鳳と同じく幸野楳嶺門下の四天王と呼ばれた京都画壇の歴史画家・谷口 香嶠(1864～1915)の研究を中心に、中国の文人画・南宗画を江戸初期に日本で受容し展開した南画が大正期に新たな解釈によって再流行するいわゆる「新南画」と呼ばれる事象と、明治末期における京都を中心とした工芸図案の流行といった二つのテーマについて考察を進めている。今回の派遣では、これまで西洋からの影響で語られることが多い近代日本南画史と近代日本工芸史に関して、当時の中国からの影響を確認することを目的とし以下の通り調査を行った。

①国立故宮博物院 常設展・企画展の作品見学および図書文献館での文献調査

今回の派遣期間中には大規模な特別展は開催されていなかったが、常設の「巨幅の名画」展では五代の伝董源の作品や、元代の伝趙孟頫、呉鎮などの大幅の5点、「造詣と美意識」展では明清時代を中心に元代の王蒙、明代の文徵明、藍瑛など文人画・南宗画、ならびにその対極とされる北宗院体画などの幅広い時代の絵画作品が23点、特集展示の「華岳写生冊」展では、清代の「揚州八怪」の一人ともされる南画家で近代日本の画家たちへ大きな影響を与えた画家の一人である華岳の画冊が全24面展示されていた。図版では分からない部分を後ほど比較検討するため、作品を細部まで観察して特徴的な描法などをメモ書きしたスケッチ図を作成した。

また、館内のデジタル情報で作品を鑑賞できるコーナーには、タッチパネルで作品の画像を拡大し細部まで見ることが可能な機器など最新の設備が整っており、海外の最新の博物館事情を知ることができたのは学芸員就職を目指す派遣者にとって大変有意義であった。

隣接する図書文献館は充実した蔵書と設備によって作品のイメージを記憶したまますぐに文献調査を行うことが出来る理想的な環境であった。ここでは、水越松南との交流や影響が指摘される呉昌碩や王一亭などの「海上派」や、日本へ留学し竹内栖鳳と近い画風を示す高剣父が創始した「嶺南派」、日治時期の台湾画家に関する画集や展覧会図録などを中心に、数多くの近代中国・台湾の作品図版に目を通した。

②国家図書館での期刊論文調査

国家図書館では主に館内の PC から日治時期の日本近代の絵画や工芸に関する期刊論文を収集した。水越松南の所属した日本南画院に言及した論文があったほか、京都に留学した台湾画家・陳敬輝に関する論文、昭和における柳宗悦と台湾の工芸美術に関する論文などを入手した。最初は PC の席の予約や印刷の方法が分からず手間取ったが、係員が親切に対応してくれた。

③国家図書館 藝術暨視聽資料中心での美術関係図書の調査

こちらには国家図書館の美術関係図書の多くが所蔵されており、開架図書に中文の工芸図案や染織に関する研究書がまとまっており、その中から特に民国期の中国の染織に関する記述を探したが、残念ながら乾隆年間を最盛としてその後美術品としての染織は廃れていったと記されるのみで、今回の調査では近代中国の染織に関する詳細は確認できなかった。しかし、明治期の万国博覧会で中国の染織品が展示されていたことが確認できたので、今後さらに近代中国の染織が産業としてどのような展開がなされたのかを調査し、それを踏まえて谷口 香嶠が携わった 明治期の日本の輸出用美術染織品の制作をアジア圏全体で考察することが必要だと思われる。

また、英文の展覧会カタログに谷口 香嶠の作品図版と彼に関する記述を発見したほか、近代中国で展開された絵画論などの美術批評の記事を集めた文献中に、南画に関する記事を見出すことができた。

研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

今回の故宮での作品調査によって、中国の唐代から日本の近現代まで脈々と続く南画の流れを大きな枠組みで捉えることが出来た。特に、岸田劉生が南画家として高く評価していた華岳の画冊を実見したことで、華岳の奇怪な動物や人物の表情の捉え方や渴筆の細線、淡彩の調子と劉生の日本画の小品の表現傾向との類似に気付き、劉生が制作した日本画の小品の表現は宋元画からの影響とする従来の定説に対し、華岳など明代の「揚州八怪」と呼ばれる画家たちからの影響も検討されるべきであるという見解を得た。

文献調査では、近代中国・台湾の絵画作品を見た中で、「膠彩画」（日治時期に台湾で展開された日本画の呼称）の作品に日本の「新南画」と同様の要素が看取され、この画風の展開を詳細に論じた文献も入手でき、「新南画」へのアジア圏からの包括的なアプローチが可能となった。近代中国の工芸図案や染織に関しては、残念ながら期待したほどの情報を得られなかったが、逆説的に言えば中国では前近代の染織品に価値があったと考えられ、実際に近代日本で受容されたのも特に明清の質の高い染織品であった。今後は、前近代の中国の染織品が近代の日中間でどのように取引されたか産業的な側面から考察を深めたい。

派遣後の研究発表の予定

今回の研究成果は、執筆中の修士論文に反映させる予定である。さらに現在準備中の日本南画院の画家・矢野橋村に関する展覧会（「矢野橋村展（仮）」於・財団法人天門美術館）で担当させていただく展示解説やパンフレットの小論文へも活用し、その他にも学会・研究会などでの口頭発表の機会等も得ることが出来ればと考えている。